議事録（議事要旨）［第1回会議］

1. 日　時　令和6年6月3日（月）15：30～17：30

2. 場　所　福井県庁地下1階 正庁

3. 議　題　（1）第3期計画の成果および現状
　　（2）第4期計画に向けた論点

4. 出席者　岩崎行玄座長、秋田喜代美委員、五十川早苗委員、荻原昭人委員、
　　菊野昭彦委員、澤田真由美委員、澁谷政子委員、髙田五月委員、
　　田中謙次委員、八田幸恵委員、平井聡一郎委員、前田鎌利委員、
　　吉川雄二委員

5. 議事要旨

○ 各委員の紹介の後、座長の互選を行い、岩崎行玄委員が座長に就任した。

【議題】

○ 座長から、教育が大切なゆえに、社会からの要請が多く、多すぎて、過労・心労になっていないか。この意味で先生たちを守っていかなくてはいけないとの発言があった。

○ 事務局から、第3期計画の成果および現状、第4期計画に向けた論点について説明を行った。

○ 委員から、一定規模の学校を確保して、子どもの精神的自立と集団的自立を達成していくことが、主体的な子どもに育っていく素地となる。地域の学校を統廃合することによって、教員不足の中でも教員の定数が確保できるとの意見があった。

○ 委員から、教育の一貫性を持ち、乳幼児期からの幼小中高と地域で子どもを育てていくこと。教科の探究学習でも総合的な学習における地域学習等の中でも、子どもが生き生きと意見参画し、地域の一人として活躍できる様々な場をつくることにより、福井への愛着心を育み、子どものウェルビーイングやキャリア教育のプランを推進していくことが重要との意見があった。

○ 委員から、誇り高い福井の教師になれることの価値を、キャンペーン等により多くの人たちに伝えてほしい、との意見はあった

○ 委員から、新型コロナウイルス感染症の流行により増加している、学校や社会に上手くなじめないと感じている子どもへの対策として、そのままの自分を認めてくれる居場所とそれを支える人員の配置が必要。また、教員に対するカウンセリングマインドの教育が必要との意見があった。

○ 委員から、学びの質の向上を目指すことにより子どもの自立を促し、教員のゆとりの創出につなげる好循環を生み出すことが、働き方改革の次の一手となる。一方、具体的な業務削減のため、学校・教師が担う業務に係る3分類14項目の役割分担・適正化を支援、横展開していくことが必要。また、働き方を見直す際に地域や保護者の理解を得ていくため、福井型コミュニティ・スクールが実りあるものになるように推進していくべきであるとの意見があった。

○ 委員から、総合的な学習（探究）の時間は、子どもに自由裁量を持たせながら考え方や学びの型を身に付けさせる、大変有用だが先生にとっては負担も大きい内容。カリキュラムや組織として上手く対応している学校の学びを県下に広げていくことが必要。また、幼小中高の縦の連携や、活動に協力してもらう社会の側への働きかけも必要との意見があった。

○ 委員から、未来に向かって夢のある子どもを育てていくためには、教育を支える教員が自らの仕事に主体的な喜びやウェルビーイングを見出せる環境、教員を目指す学生が、クリエイティビティを発揮できる環境が福井にはあると実感できる制度改革が必要との意見があった。

○ 委員から、今自分たちが学んでいることが将来の生活や人生にどうつながっていくのかイメージできていない子どもが沢山いる。将来をイメージするのは家族、学校の先生、地域の人たちが一番身近な大人の存在であり、一生懸命な大人の姿を子どもたちに見せることが重要との意見があった。

○ 委員から、県内の地域の経済や企業をあまり知らずに出ていってしまうために東京等に進学した大学生が戻ってこない。やりたいことにチャレンジさせる環境をつくり、それに社会や企業が関係して一緒に子どもを育てていくと、大学卒業時に福井の企業が思い浮かぶ。幼少期からリベラルアーツ教育を行い、自分の問題として探究できるものをつくることが必要との意見があった。

○ 委員から、誰一人取り残されない学びのため、授業が分からなかった場合に、個人に対して様々な教え方を用いて学びの遅れをフォローするような柔軟な教育システムができると良いとの意見があった。

○ 委員から、学校でプログラミングに取り組んでいるが、創造する、妄想する力の育成に欠けている。どういうものが世の中に必要かと考えて、空想して形にしていくのがプログラマー。リベラルアーツやデザイン思考が重要との意見があった。

○ 委員から、福井県に留まるか、自身のキャリアを追求するのかという対立のさせ方ではなく、どこにいても地域を支え、ネットワークをつくって地域創造していく人を目指していくということが大切との意見があった。

○ 委員から、高校における地域密着型の探究の成果は全国的に認められており堅持してほしい。その上で、教科学習と社会をつなぐ物の見方、考え方を働かせた深い学びを実現していくため、教育学習を学校の中で閉じず、教科の知識を使って社会を見てみる学びの実行が必要との意見があった。

○ 委員から、優れた中高教員の確実な養成と採用という政策を力強く立ててはどうか。教員免許を取るモチベーションを維持するため、例えば福井県の教員を目指している人の会、教員採用試験の情報交換会、定期的な福井県の現場の観察実習等があると良いとの意見があった。

○ 委員から、ただの職場体験や進学先調べのようなキャリア教育らしきものから、本当の意味でのキャリア教育、キャリアデザイン、そしてライフデザイン、というところまで育てていかなければならない。また、情報活用能力はキャリアデザインを含めて全ての活動や価値を支える基盤であり、もう少し強調しても良いとの意見があった。

○ 委員から、教科学習も問題解決型の学習（Problem Based Learning）として、45分50分の学習でも一つの問題を解決することを通して教科の狙いを達成する、自分たちが求めていく学びに変えることが重要との意見があった。

○ 委員から、働き方改革は新しい学びに先生方が取り組む時間を生み出すために必要であるが、ICT機器の活用等による効率化で済む問題ではなくなってい

るため、学校がやるべき仕事の総量を削減することが必要との意見があった。

○ 委員から、県外に出てしまうと福井を知る機会が中々ないため、ふるさととの接点をどう持っていくか課題。総合学習を入口として、地域の経営者など様々な人と接点を持つことがより良いキャリア選択のためにも重要との意見があった。

○ 委員から、総合的な学習は、いかに自分で探した個別のテーマを持ってこられるかがポイント。また、プレゼンを授業で行う際に質疑応答の時間を取り、質疑応答力を高めることが、社会に出て自らキャリアをつくっていく際に力になるとの意見があった。

○ 委員から、教員が元気でないと子どもは元気にならない。教員が本来の子どもを教える以外の業務に追われて疲弊する、教員不足により産育代の講師がおらず現場の教員が疲弊する状況を改善することが必要。また、役職定年になった定年延長の教員のモチベーション向上も課題との意見があった。

○ 委員から、中学校の部活動の地域移行について、全県的な統一した指針があると目的意識を持って取り組みやすいとの意見があった。

○ 委員から、好きなことを自ら決められない子どもが増えているため、小さなことから選択する時間を増やせると良い。また、自分の良さを自分で発信する力を育てるべきであるとの意見があった。

○ 委員から、福井には自然のフィールドで考えることができる環境という強みがある。県内の子どもにこそ体験する機会を与えるべきであるとの意見があった。

○ 座長から、計画策定にあたり、自分たちの力でやれることを踏まえて取組みを考えるフォアキャストと、政策的に高い旗を掲げるバックキャストを区別して両方を考えることが大切。各委員が譲れないと考えるバックキャストは何か話してほしいとの発言があった。

○ 委員から、教育の一貫性と、学校間の力を結集し引き出し合うネットワークづくりが重要との意見があった。

○ 委員から、教員が楽しく仕事ができ、子どもが楽しく学校に行けるための両者の健康が重要との意見があった。

○ 委員から、教員と子どもを集中して一定規模を確保するための学校再編が重要との意見があった。

○ 委員から、人や予算に限りのある中で解決策を見出す上での柔軟性が重要との意見があった。

○ 委員から、先生が子どもを信じ、行政が先生を信じるという人間観の転換が重要との意見があった。

○ 委員から、学校教育を多様な立場の人に開くことが重要との意見があった。

○ 委員から、子ども同士、子どもと大人、子どもと地域がつながることが重要との意見があった。

○ 委員から、人材を育てるための人格形成が重要との意見があった。

○ 委員から、デジタル化を基盤とした学校の転換、授業を変えていくことが重要との意見があった。

○ 委員から、多様な接点の創出と、コミュニケーションの増大が重要との意見があった。

○ 委員から、教員の魅力を高めていくことが重要との意見があった。

○ 座長から、教育では人とのつながりや信頼など数値化できないことが重要。一生懸命やっている大人の姿を見せることがカギとなるとの意見があった。

○ 委員から、働き方改革について、経済産業界でDX導入により克服しているケースを共に学び共有することにより、学校の時間外勤務時間が減らせるのではないかとの意見があった。

○ 委員から、探究学習について、段階性を持って小中高の12年をかけて育てていくことを県の方針としていくべきである、との意見があった。

○ 座長から、小中の先生は非常に真面目なため、すべてのことを完璧にやろうとしていると思う。組織としてゆっくり上げていく、学年ごとにテーマを決めて、リレーする考え方があると良いとの意見があった。

○ 委員から、福井は生徒が進学先を選ぶ際に国公立志向が強すぎる。私立、国公立を問わず、自分が目指したいところがどこかを温かい目で見てあげることで、生徒が自分でやりたい学びの実現につながるとの意見があった。

○ 委員から、進路に海外という選択肢がない。首都圏の高校では海外の大学が指標になっており、視野を広げていくことが重要との意見があった。

○ 委員から、現在の教育に関する大綱に記載されている、タテ持ち、教科会、宿題のチェックなどを丁寧に行う教員の真面目さ、といった記載により現場が柔軟性を失いやすくなっている可能性はないかとの意見があった。

【その他】

○ 事務局から、今後のスケジュールについて説明した。